



**令和6年度
コミュニティ・ソーシャルワーカー(CSW)
生活支援コーディネーター
活動報告書**



社会福祉法人 目黒区社会福祉協議会



目 次

はじめに	1
1 活動概要	1
2 目黒区の地域特性	2
3 コミュニティ・ソーシャルワーカーの取組 生活支援コーディネーターの取組	
個別相談事例	4
地域相談事例	6
地域づくり事業	8
目黒区における協議体	10
その他の取組	13
4 活動実績	14
5 まとめ	17
6 今後の展望	17



はじめに

目黒区社会福祉協議会では、平成29年度から生活支援コーディネーターによる住民主体の生活支援サービスの創出支援や支え合い活動の支援を開始し、令和3年度からは、コミュニティ・ソーシャルワーカー（以下、「CSW」という。）を兼ねる形で、段階的に体制を拡充し、地域の福祉課題の解決に取り組んでいます。

令和6年度から重層的支援体制整備事業が目黒区でも本格実施となり、CSWは参加支援事業、地域づくり事業、アウトリーチ等を通じた継続的支援事業のほか、多機関協働事業における重層的支援会議の開催への協力などに取り組んできました。

NPO法人が実施する食料配付会において出張相談会を定期的の実施したり、団体や施設での活動の場に積極的に出向いたりするなど、アウトリーチ機能を活かした相談対応に力を入れたことで、出張先で寄せられる相談も増え、緩やかな見守りや継続的な伴走支援につなげることが少しずつできるようになってきました。また、ひきこもりに悩むかたや当事者を抱える家族向けの学習会・家族会の実施のほか、生きづらさを抱えるかたの新たな居場所づくりへの支援も開催回数を拡大してきています。

地域における支え合いの仕組みづくりでは、区内5つの「協議体」の運営を通して、地域の情報や課題を共有しています。安定的な継続が図られるよう、複数の協議体で地区の特性に応じて新たなメンバーを迎え、協議体活動も活性化してきました。

令和6年度活動報告書では、CSWの個別支援の事例や食支援の輪を広げる地域支援の事例、居場所づくりのほか、協議体の活動などを紹介しています。皆様のご理解の一助になれば幸いです。

目黒区社会福祉協議会 事務局長 長崎 隆

1 活動概要

■コミュニティ・ソーシャルワーカー（コミュニティソーシャルワーク事業）

コミュニティ・ソーシャルワーカー（CSW）は、高齢者・障害者・子どもなど全ての人々を対象に、制度の狭間にある日常生活上の困り事や心配事を受け止め、様々な関係機関などにつなぐ活動をしています。積極的に本人のもとに出向き、そのかたの思いを受け止めて必要な情報を提供しながら、そのかたに寄り添った伴走支援を行います。地域の様々な困りごとに対して、関係機関・団体や行政と連携して、地域の中での解決に向けた支援を行っています。

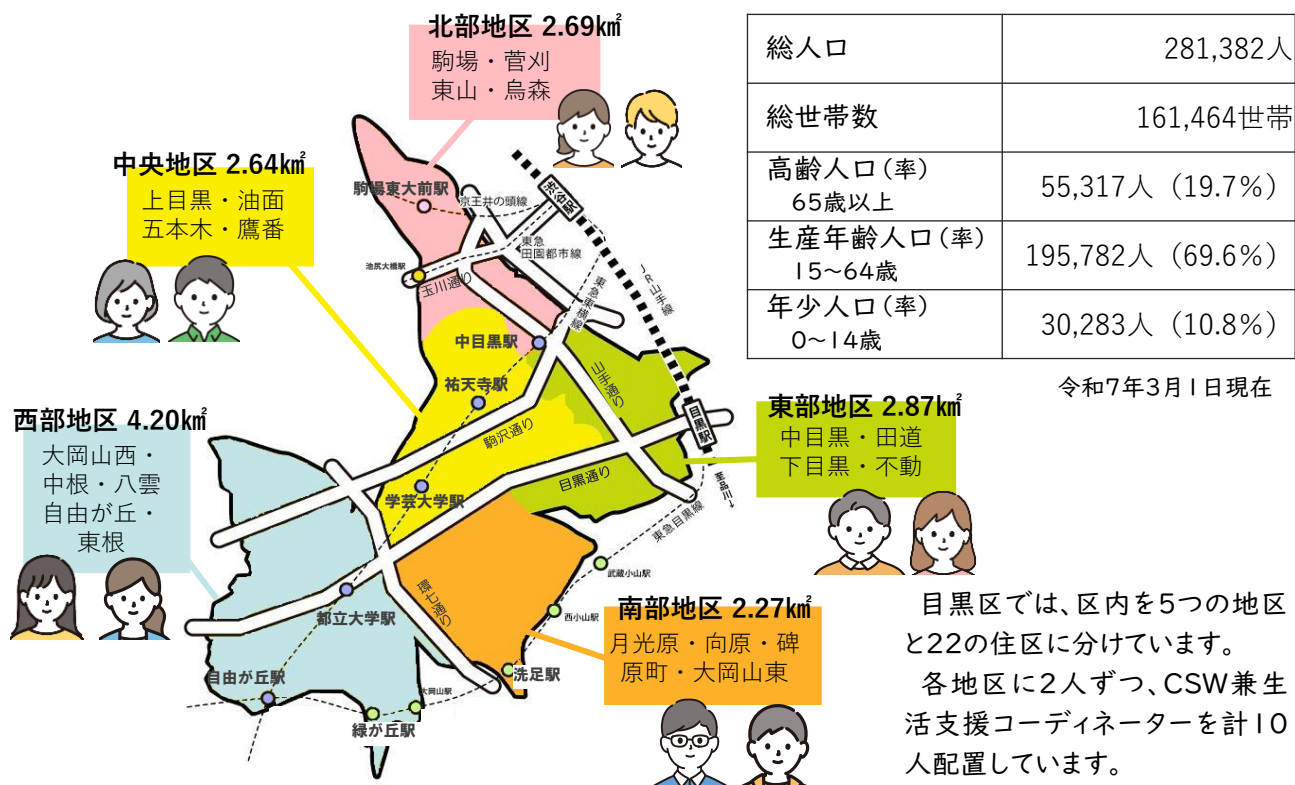
令和6年度からは、重層的支援体制整備事業が目黒区で本格実施され、CSWによる地域づくりや参加支援、アウトリーチ等伴走支援の取組は重層的支援体制整備事業の位置づけの中で行われています。多機関協働事業に関しては、目黒区から支援の実施について一部を受託しており、区と連携しながら進めています。

■生活支援コーディネーター（生活支援体制整備事業）

介護保険法に基づく事業で、地域住民や団体、企業の関係者など様々な人々と連携しながら、日常生活上の支援体制の充実・強化及び高齢者の社会参加の推進を一体的に図るために、「生活支援コーディネーター」と「協議体」が創設されました。

目黒区では、5つの日常生活圏域（北部・東部・中央・南部・西部の各地区）にそれぞれ協議体（第2層協議体）を設置しています。生活支援コーディネーターは、協議体と連動しながら、社会資源の把握や関係団体との顔の見える関係をつくり、高齢者の生活上のニーズとマッチングや生活支援サービスの創出を目指して地域の支え合い活動を推進する役割を担っています。

2 目黒区の地域特性



日常生活圏域(地区)	北部	東部	中央	南部	西部
人口	46,707人 (46,641)	58,545人 (58,166)	55,184人 (54,876)	50,683人 (50,206)	70,263人 (69,908)
世帯数	26,918世帯 (26,806)	34,499世帯 (34,098)	33,559世帯 (33,069)	28,049世帯 (27,656)	38,439世帯 (38,145)
一世帯当たりの人数 (人口÷世帯数)	1.74人 (1.74)	1.70人 (1.71)	1.64人 (1.66)	1.81人 (1.82)	1.83人 (1.83)
高齢者数	7,537人 (7,581)	10,631人 (10,561)	11,490人 (11,596)	10,871人 (10,868)	14,788人 (14,597)
高齢化率	16.1% (16.3)	18.2% (18.2)	20.8% (21.1)	21.4% (21.6)	21.0% (20.9)
介護保険 要介護等認定者数	1,569人 (1,548)	2,401人 (2,307)	2,661人 (2,677)	2,428人 (2,386)	3,099人 (3,025)

令和7年3月1日現在
()は令和5年10月1日現在

前年度と比べ、総人口数、総世帯数は増加していますが、高齢者率は19.7%と横ばいで推移しています。中目黒駅や学芸大学駅に近い北部・東部・中央地区は人口と世帯数の割合から、単身世帯が多いことが分かり、高齢化率が最も高い南部地区は高齢者世帯が多いことが分かります。西部地区は、最も高齢者数が増加していますが、昨年度と比較した人口と世帯数から、同居世帯が多いことが考えられます。

東京23区の高齢化率は22.1%(*令和6年9月15日現在)と前年度よりも0.1%低くなっていますが、目黒区は横ばいとなっています。一方で、後期高齢者の占める割合が年々高くなる傾向にあり、介護保険要介護等認定者数も増加傾向にあります。ただし、若い世代の流入が考えられる中央地区は、高齢化率は20%を超えていますが、5地区で唯一要介護等認定者数が減少しています。

北部地区

世田谷区と渋谷区に隣接する地区で、目黒川が流れ、低地と台地からなる起伏に富んだ地形となっています。東京大学駒場キャンパスや東京音楽大学中目黒・代官山キャンパスなどの教育施設が立地するほか、駒場公園、菅刈公園、東山公園などの大規模な公園があることから緑が豊かな地域でもあります。池尻大橋駅や中目黒駅の周辺や山手通り、目黒川沿いなどを中心に個性的な店舗や施設などの立地が進み、多くの人が訪れる魅力があるまちとなっています。

令和6年度は、駒場東大前駅向かいにある、国家公務員宿舎駒場住宅跡地で、令和9年1月の開設に向けて、特別養護老人ホーム等整備工事が始まりました。

東部地区

目黒川が流れ、低地と台地からなる起伏に富んだ地形が特徴です。中目黒公園や都立林試の森公園などの大きい公園があり、正覚寺、大圓寺、大鳥神社、目黒不動尊などの歴史・文化的資源が多くあります。中目黒駅や目黒駅周辺、山手通りや目黒通りの沿道、目黒川沿いなどを中心に商業施設や企業が存在し、働く人が行き交うまちとなっています。地域交通バス「さんまバス」の実証運行によって、目黒区総合庁舎から目黒駅間のアクセスが良くなりました。中目黒・下目黒エリアでは、地域団体やNPO法人による、多世代交流の場、不登校児童や多国籍等の児童の居場所や学習支援の場が4か所増えるなど、幅広い世代に向けた地域づくりが行われています。

中央地区

坂の多い目黒区の中で、概ね平坦な台地上にあります。著名な場所として、祐天寺や碑文谷公園が挙げられます。低層の住宅が多いことが特徴となっています。祐天寺駅や学芸大学駅の周辺では商店等の入れ替えも目立つ中、昔ながらの商店も代替わりをしながら続いています。

学芸大学駅周辺で始まった「みんなでつくる学大高架下プロジェクト」では、令和6年7月から3つのキーとなる事業が順次開業し、若い世代を巻き込んだ新しいまちづくりの取組が始まりました。

また、開園して70年になる油面公園が8か月のリノベーション工事で大きく生まれ変わるなど、公共施設の変化もみられています。

南部地区

大田区と品川区に隣接する地区で、人口密度が区内で最も高く、木造住宅が多い地域があるなど、住宅の割合が高い特徴のある地区です。現在、木造住宅密集地域整備事業などにより、誰もが安心・安全で快適に暮らし続けられるまちづくりが着実に進められています。すずめのお宿緑地公園や清水池公園といった個性豊かな公園のほか、碑文谷八幡宮、円融寺、サレジオ教会など、歴史的な建造物も数多く点在しており、地域の文化的魅力を感じられるエリアです。区立中学校の統合に伴い、第七・第八・第九中学校で様々な閉校イベントが開催されました。

西部地区

大田区と世田谷区に隣接する地区で、閑静な住宅地が広い面積を占めています。都立駒沢オリンピック公園や呑川緑道など緑豊かで、私立・公立の学校や教育機関が整い、ファミリー層にも人気があります。大岡山にある旧・東京工業大学は、令和6年10月に東京医科歯科大学と統合し、東京科学大学として新設されました。商業集積地でもある自由が丘駅周辺は地域経済の活性化や防災機能の強化を目的に再開発が進められており、これからまちの雰囲気が大きく変わる見通しです。

3 コミュニティ・ソーシャルワーカーの取組 生活支援コーディネーターの取組

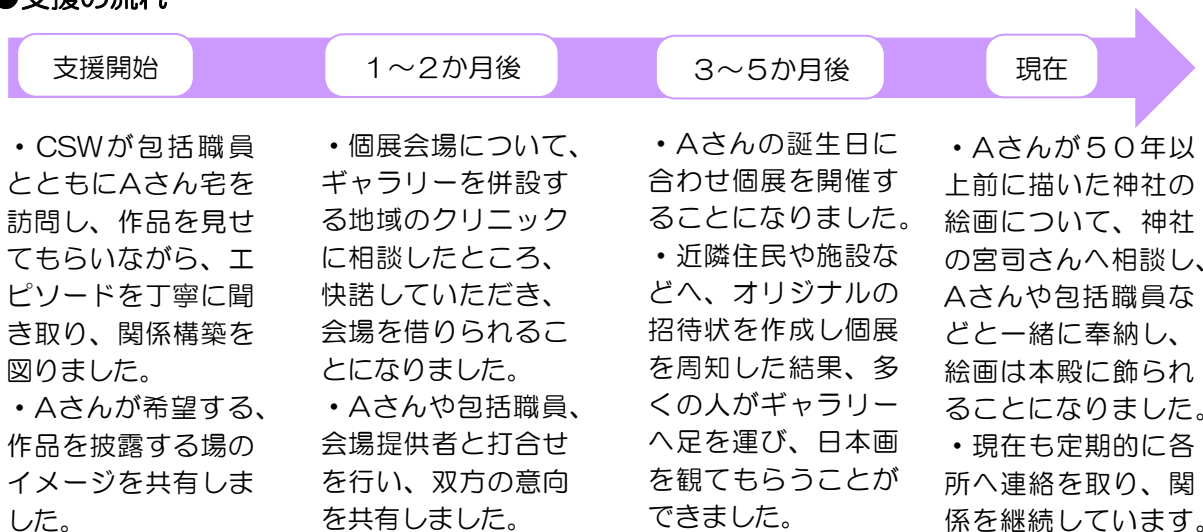
【個別相談事例① 参加支援】 地域のクリニックや神社の協力により 本人や支援者の思いが実現につながった事例

●相談の概要

本人	90代女性（Aさん）		
相談者	包括※職員	内容	地域の方々に日本画を見てもらいたい。
状況	Aさんは、日本画を教えながら、これまで数々の作品を描いてきましたが、加齢とともに、先生をされていた記憶も少しずつ薄れ、作品の数々が部屋に眠ったままになっていました。Aさんを支援する包括職員から、これらの作品を地域の方々に見てもらう機会を作れないかと相談を受けました。		

※包括・地域包括支援センター

●支援の流れ



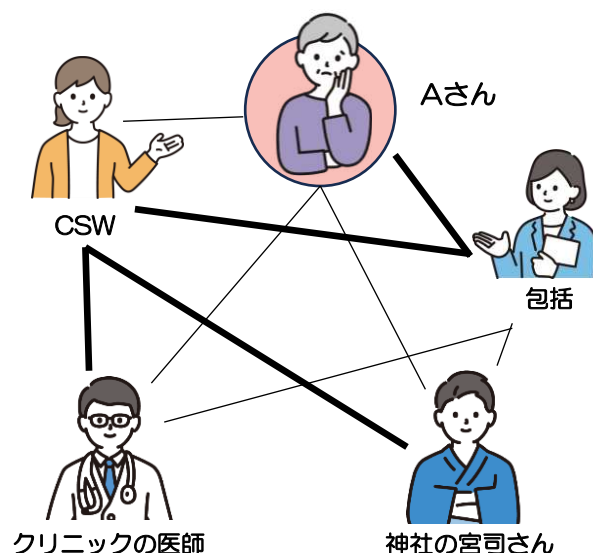
●これまでの成果

地域のクリニックや神社の協力によって、Aさんの日本画を地域のかたに観てもらう機会を作ることができました。個展や奉納をきっかけに、Aさんの明るい表情や喜びの言葉を引き出すことにつながりました。

●今後の方向性

Aさんや包括職員の想いを実現するために、日頃のCSWが持つつながりが役立ちました。

今回新たに築くことができたネットワークを活かして、個人と地域資源のつながりをさらに広げていきます。



【個別相談事例② 地域のつながり・生活援助】 障害のある子と暮らす世帯への支援事例

●相談の概要

本人	50代・障害のある子と暮らすひとり親（Bさん）		
相談者	本人	内容	子どもの介護と家事に追われて余裕がないため、生活上のちょっとした困り事へのお手伝いをしてほしい。
状況	目黒区へ転入したばかりで近所に知り合いがいませんでした。ひとり親世帯で障害のある子どもを介護しながら暮らしていますが、自身の病気もあり、気力や体力の低下もあって、生活上の家事に滞りが出ていました。		

●支援の流れ

- （１）生活上で困っている状況を確認するとともに、これまでの生活歴や苦勞に耳を傾け、思いを受け止めました。買い物や外出介助など無料で頼めるサービスを希望されました。
- （２）Bさんと話す中で、以前はお子さんの身体に合った寝間着や前掛けを手作りしていたが、今は気力体力が衰えて手が回らないことを伺い、作れずにいた寝間着やエプロンの製作を区内の裁縫ボランティアに依頼する調整をCSWが行いました。

●成果と今後の方向性

じっくりとご本人の話を聞くと、当初の想定とは異なる部分でニーズを拾うことがあります。本ケースも、当初希望していた無料の生活援助サービスにはつなげられませんでした。が、お子さんのための衣服を作ってくださる裁縫のボランティアにつなぐことができました。互いの顔は見えなくても、機能的にもデザインの的にも工夫を凝らして作ってくれた衣服を通じて、Bさんとボランティアの間には温かな心の交流が生まれています。

【個別相談事例③ 社会参加】 特技を活かして地域につながった事例

●相談の概要

本人	40代男性（Cさん）		
相談者	本人	内容	働きたい。社会とつながりたい。
状況	Cさんは、20代の頃から精神疾患を患い、発達障害の診断も同時期に受けました。過去に就労歴があるものの、現在は自宅で過ごすことが多くなっていました。Cさんは自分の作品を販売する仕事をしたい気持ちもありましたが、仕事にするプレッシャーも感じていました。		

●支援の流れ

- （１）自宅に訪問し、作品作りへの思いなどを伺い、地域で活躍できる場を検討しました。
- （２）CSWが参加する地域イベントのブースに作品販売コーナーを設置し、来場者との交流の機会としてCSWと共に接客することを提案。値段設定や装飾など話し合いを進めていきました。

●成果と今後の方向性

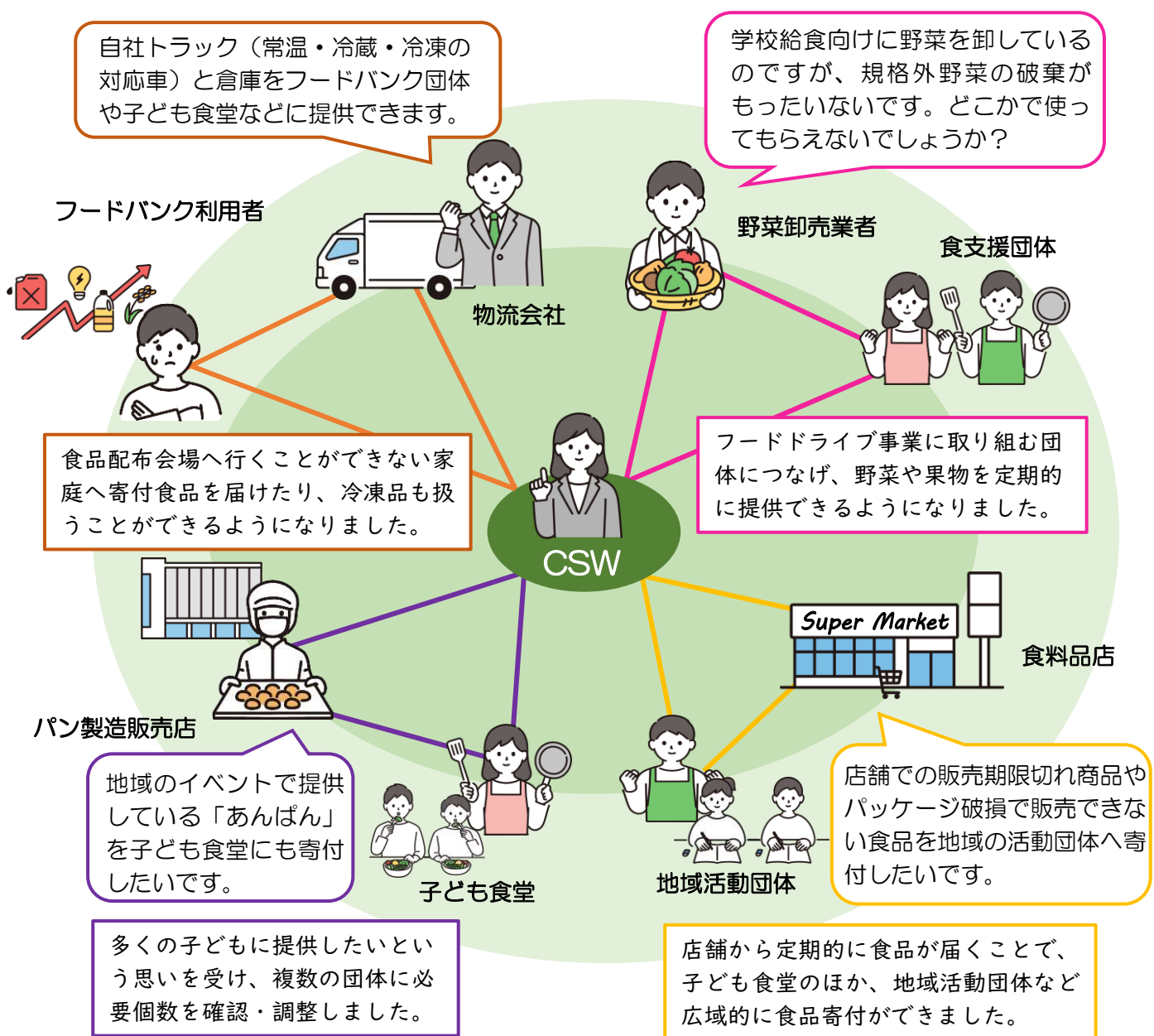
当日は緊張していたものの、接客を通じて、直接作品の感想を聞いたことや、売り上げにつながったことは、Cさんにとって大きな自信となりました。今後も積極的に声掛けし、地域のかたとつながれる場、本人の抱えている思いを共有できる場の情報を伝えていくなど、自分らしさを大切にできるよう支援を行っていきます。

【地域相談事例 地域づくり】 地域資源（企業や人材）のチカラを活用した 食支援の輪のひろがり

企業からの食品寄付をはじめとした社会貢献活動に関する問合せが年々増加傾向にあります。CSWはこれまで関係を築いてきた、食を通じた地域活動団体（食支援団体）と橋渡しをするほか、両者が無理なく連携できるよう情報提供やアドバイスなどを行いました。

また、令和3年度から開催している、食支援団体の情報交換会への参加を促し、企業や団体、地域住民がつながれる場を設けています。

【企業からの社会貢献活動に関する問合せの対応例】



※フードバンク：寄付された食品等を無償で提供する活動や組織

※フードドライブ：個人や団体が食品を寄付する取組

●食支援活動情報交換会「食のチカラでたすけあい〜めぐろの食支援に参加しよう〜」

食支援活動に携わる人材を増やすことを目的として、本イベントを開催しました。当日は42人が参加し、とても活気あるイベントとなりました。

食支援活動に関心がある方々に向けて、参加団体より活動内容や、団体が求めるチカラ（人材・物資・場所など）について説明していただきました。その後は各グループに分かれ、「活動団体に聞きたいこと・気になること」「自分にできること／活動を継続するために必要なこと」のテーマで交流を深めました。

イベント終了後も、団体の活動に関心を持ってくださったかたが参加しやすいように、見学の日程調整や同行などのサポートを行いました。



▲当日の様子

めぐろの食支援情報シート

団体紹介の資料として、作成しました。子ども食堂やフードバンク・フードドライブなど、「食」に関わる団体と、活動に必要なチカラ（人材・物資・場所など）をまとめました。



●成果

企業からの寄付や協力を通じて、団体への支援ができたほか、ニーズや状況、その他近況なども含めて有益な情報収集ができ、今後の連携につながる関係づくりができました。

また、「食のチカラでたすけあい〜めぐろの食支援に参加しよう〜」を開催したことで、食支援活動に関心のある方々と団体、団体間、一般参加者同士のつながりを作ることができました。



▲寄付食品の数々

●今後の方向性

年々、企業からの地域貢献活動に関する問合せが増えていることから、今後も増加が予想されます。これからも一つひとつ、丁寧に対応し、社会貢献を希望する企業と地域活動団体の橋渡しをし、地域の中で支援の輪が広がるよう努めていきます。

また、イベントを通して、新たなチカラの発掘や、寄付食品等の受け入れ体制の拡充に努めます。

【地域づくり事業①】 ひきこもり当事者の居場所「こもりびとカフェ」

ひきこもり状態にあるかたのご家族への支援として、家族会の運営支援や、ひきこもり学習会の開催を行ってきました。取組を重ねるうちに会った当事者への支援や、まだ支援につながっていない当事者の発掘を目的として、ひきこもり状態にあるかたや生きづらさを抱える人が、安心して参加し他者と交流できる居場所づくりに取り組みました。

「こもりびとカフェ」の開催

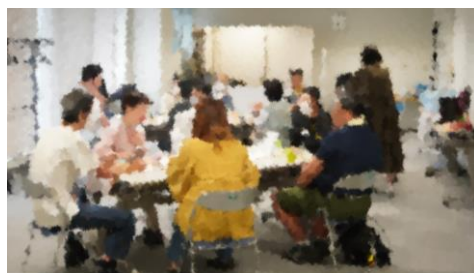
第1回（令和6年7月）

コーヒー等の飲み物とお菓子をいただきながら、6～7人のグループで茶話会を行いました。

趣味のことや、日頃の過ごし方といった気軽な話から、自身の生きづらさや困りごとまで、自由なテーマで話し合いました。

互いに質問したり共感したり、初対面の参加者同士でも自然に会話が弾んでいました。

参加人数：11人



▲茶話会の様子

第2回（令和7年1月）

リクエストを募ってBGMを流し、トランプやカードゲームを取り入れました。ゲームを通して参加者同士のコミュニケーションが生まれ、楽しい時間を共有できました。

1回目からのリピーターが半数を占め、継続した居場所が求められていることが伺えました。

参加人数：11人



▲お菓子を食べながら、おしゃべりを楽めます

カフェのお手伝いを通じた社会参加のステップ

ひきこもり当事者であるAさんに、社会参加のステップとして、お茶出しの役割を担っていただきました。事前に丁寧な打合せをし、Aさんが落ち着いて作業できるよう、注文の取り方を工夫しました。Aさんからは「チャレンジする場を与えてくれて感謝しています」との感想をいただきました。



▲注文を受けてドリンクを作ります

今後の方向性

回数を重ねるごとに参加者同士が顔見知りとなって、関係性が継続されていくとともに、新規の参加を促すためにも、定期的な開催が必要と考えます。参加者から好評の声も多く、生きづらさを抱えた当事者にとって、ひとつの居場所になるよう、引き続き取り組んでいきます。

【地域づくり事業②】 子どもの多様な居場所（サードプレイス）づくり

これまでも、子どもの多様な居場所に関する理解を深めることを目的に、講座『子どものサードプレイスについて考える』の開催や、東京都写真美術館等との共催による『いどりふれいす』を実施し、居場所づくりに取り組んできました。令和6年度は、より子どもたちに寄り添った開催内容となりました。

子どものサードプレイスについて考える

昨年度、参加者から「子どもの気持ちや意見を直接聞いてはどうか」との意見を受けて、今年度は小学生とその保護者、関心のあるかたを対象に開催しました。子どもの居場所や学習支援を行っているNPO法人FOSの大学生へ協力を呼びかけ、輪投げや気配切り、落書きせんべいなど、子どもと大人と一緒に楽しめる遊びをすることで、子どもたちがリラックスして話し合いに参加できる雰囲気づくりをしました。

また、会場の福祉施設こぶしえんは、普段から地域開放しており、当日は敷地内で遊ぶ児童に声をかけ、小学校低学年～中学生まで様々な児童を交えた開催となりました。

グループトークでは、低学年グループの「みんなでワイワイ楽しむ場所」に対し、高学年グループは「自由にのんびり（静かに）過ごす場所」を求めていることが分かり、学年が上がるにつれて塾や習い事で忙しくなるという子どもたちの日常をうかがい知ることができました。

参加人数：計17人



▲グループトークの様子

いどりふれいす

昨年度は休日開催のみでしたが、今年度は学校に行き渋りのある児童の居場所となるよう平日にも2回開催しました。そのうち1回は、学校に行くことへの不安が強くなる夏休み明け前後に行い、実際に不安な気持ちを抱えている児童が参加し、その後もリピーターとしてつながりました。居場所を提供していただいた東京都写真美術館ならではの暗室体験やスタジオ内で光で絵を描く「ライトペインティング」、デジタルカメラを使った撮影プログラム体験のほか、館内図書室の見学など、子どもたちにとって身近な場所と感じてもらえるよう意識しました。

プログラムを通じ、ボランティアやスタッフからの自己肯定感を高める声掛けや、写真に触れるだけでなく、多世代の人とつながる機会は、子どもたちにとって安心できる居場所のひとつになったのではと考えられます。

参加延べ人数：計102人（4回開催）



▲撮影写真鑑賞の様子

今後の方向性

今後も、子どもたちが安心して過ごせるサードプレイスの普及啓発を目的として、子どもが集まる場へ出向き、居場所に関する意見や情報を収集し、それらを基に情報発信を行う取組を検討します。

また、引き続き『いどりふれいす』を企画、開催することで、美術館も子どもが自分らしくいられる、安心できる居場所（サードプレイス）のひとつであると認識が広がるよう、取り組んでいきます。

目黒区における協議体

介護保険法に基づく生活支援体制整備事業における「協議体」は、情報共有及び連携・協働による資源開発等を推進するために、多様なサービス提供主体が参画し、定期的な情報の共有・連携強化の場として区市町村が設置することとされています。

目黒区では、平成29年度から30年度にかけて、区内の5つの地区（北部・東部・中央・南部・西部）を日常生活圏域として、それぞれ協議体（第2層協議体）が設置されています。各地区の協議体は、生活支援コーディネーターが事務局機能を担い、地域住民や活動団体とともに運営しています。

町会・自治会、住区住民会議、民生児童委員、ミニデイ・ふれあいサロン活動者、竹の子クラブ（旧老人クラブ）、社会福祉法人、NPO法人、地域包括支援センター、介護サービス事業所、見守りボランティアなど、地域活動をしている方々が参加しており、協議体を構成するメンバーは地区ごとに異なっています。令和6年度は、複数の協議体において新たなメンバーを迎えたことで、幅広い視点での協議や取組など、各協議体運営の活性化や安定継続につながりました。

また、各地区で開催した協議体主催のイベントは、テーマはそれぞれ異なるものの、各協議体のメンバーが持つ知識経験や地域ネットワークによる貢献によって、どの地区も盛況に開催することができました。協議体活動を通じて、地域での支え合い活動の普及啓発と活動者の掘り起こし、地域住民同士の交流の場づくりを展開しています。

北部いきいき🍀支え合いネットワーク会議 （ほくいきネット）

●令和6年度の活動

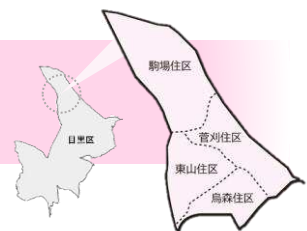
令和5年度から、高齢者のフレイル予防や健康維持、地域活動の周知を目的に「北部いきいきふれあいひろば（略称：ほくいきひろば）」の開催に向け、準備を進めてきました。

令和6年度は、高齢者の健康維持に不可欠な「からだ」「こころ」「あたま」の3つのテーマに分けて「ほくいきひろば」を3回開催し、それぞれに合わせて、北部地区の専門職による講話と、地域活動の紹介を行いました。

【コーディネーターより】

住み慣れた地域で暮らしていくためには、どこへ行くにも坂の上り下りが必要だと、特に菅刈や東山で改めて実感しました。参加者からは、「外へ出ることの大切さがよく分かった」「社会と健康という新しい視点が興味深かった」「身近に感じていたことを詳しく聞けて良かった」とのコメントが聞かれ、一歩でも外へ出て、人と会話し、交流を図ることが、生きがいにつながることを知ってもらえたと思います。

今後もメンバーと話し合いながら、高齢者のフレイル予防や健康維持のほか、地域活動の活性化を促す取組を進めていきます。



▲会議の様子



▲ほくいきひろばの様子

東部ふれあい協議会 (とうふれ協議会)



●令和6年度の活動

暮らしに役立つ地域情報やサービスの紹介のほか、参加団体や住民同士がつながり、新たな協力関係や活動のきっかけづくりを目的とした「東部地区ふれあいフェスティバル」を下目黒住区センターで開催しました。活動団体の紹介のほか、推しスポットを紹介する「推しスポマップ」を作り掲示しました。フェスティバル開催後、新たなつながりを作るため、出店団体を招いて交流会を実施しました。

【コーディネーターより】

「東部地区ふれあいフェスティバル」は、250人近くのかたに会場いただき、多くのかたに情報を届けることができました。ステージ企画には地元中学校のダンス部に出演いただき、若年層やその保護者の参加を促進することができました。幅広い世代の地域住民が集い、地域のつながりを深める貴重な機会となりました。

今後は情報提供だけでなく、参加者が生活の困りごとや悩みを気軽に話せるよう相談ブースの設置を検討します。福祉や地域情報を提供するとともに、専門職との対話の場を設けることで、安心して参加できるフェスティバルを目指していきたいと考えています。



▲会議の様子



▲東部地区ふれあい
フェスティバル



▲フェスティバル
交流会の様子

中央まるごとネットワーク (まんなかネット)



●令和6年度の活動

これまでの活動で、メンバー自身が地域活動を知ることが大切だとの意見から、地域で食支援活動に取り組む2団体の代表者を招き、取組や活動に対する思いなどを伺い、理解を深めました。これら団体を応援するため、余剰食品を参加費の代わりとした「音楽コンサートDEフードドライブ」をお宝人(※)の協力のもと開催し、地域の皆さんに知ってもらう機会となりました。

※知見や特技を持つ地域住民を「お宝人(びと)」と呼んでいます。

【コーディネーターより】

今年度から、障害者支援や介護サービス事業所、福祉施設、竹の子クラブなど、地域で様々な支援や活動に携わることが加入したことで、多様な視点を共有しながら話し合いが進められています。

地域のかたが活動団体の取組を直接知る機会を設けたことで、「自分にもできることはないか」と援助につながる動きもみられました。

今後もイベントの開催や地域に出向いた活動情報の発信などを行い、活動団体の周知や個人の力を地域の中で活かせるよう努めていきます。



▲会議の様子

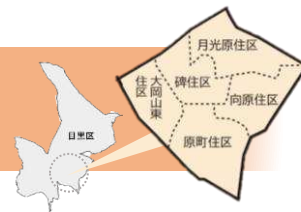


▲地域活動者による講話



▲音楽コンサートDE
フードドライブ

南部支え合いまち会議
(なんまち会議)



●令和6年度の活動

人と人がつながるきっかけを作ることを目的に、身近な地域で活躍するかたをゲストスピーカーとして招いて、「支え合いまち講座 みんなで話そうご近助物語」を開催しました。南部地区内の全住区エリアで開催することができたため、これまでの支え合いまち講座の振り返りや、今後の取組について検討しました。



▲ 会議の様子

【コーディネーターより】

「支え合いまち講座 みんなで話そうご近助物語」は、平成30年度から実施し、住民同士の新たな交流機会の創出や、地域活動への参加を促進することができました。今年度をもって全住区エリアでの講座を展開できたことから、一旦の区切りとし、メンバー間で地域課題の共有と意見交換を実施しました。その中で男性の参加率が低い傾向が見られる点が話題となりました。

次年度は“男性高齢者の孤立防止”を目的とし、ヒアリング調査や男性限定イベントの開催を通じて、男性高齢者のニーズ把握に取り組んでいきます。



▲支え合いまち講座
「バルーンアート」体験



▲「アンチエイジングストレッチ体操」体験

西部支え合いまち会議
(にしまち会議)



●令和6年度の活動

住民懇談イベント「支え合い・いどばた会議」ハ雲編・中根編をそれぞれ開催し、住民や活動団体が一同に介して、地域で活躍する団体・グループの取組を紹介するとともに、地域の中でつながりを持つにはどうしたらよいかざっくばらんに話し合いました。また、イベントと連動して、地域活動の情報を集めた「にしまちいきたより」を発行し、活動の周知、住民の参加支援に活用しています。



▲会議の様子

【コーディネーターより】

今年度のいどはた会議では、児童から高齢者まで多世代のことについて話し合っていたき、住民目線の地域課題を知ることができました。挨拶や声掛けの仕方に困るなどの話もあり、引き続き地域でのつながりや顔の見える関係を作るための活動を考えていきます。

これまでは住区エリアごとにイベントを開催してきましたが、今後はエリアの枠を超えた開催を検討します。地域における支え合いの輪を広げるため、人と人をつなぐ様々な活動について、話し合いながら理解を深めていき、地域課題解決に向けた取組を具体的に考え、実施していきます。



▲支え合い・いどばた
会議（中根編）



▲にしまちいきたより
(八雲編)

その他の取組① 情報発信・活動周知

ささえあい レポート	年3回発行。CSW・生活支援コーディネーターが把握した地域資源や地域住民の声を伝えています。
ホームページ	ささえあいレポートの掲載、イベント告知、活動報告書の掲載
Facebook	「CSWのつぶやき」は月2回更新。団体や地域の催しに出向き取材した内容や、CSWの日頃の取組などを紹介しています。
その他PR	目黒区総合庁舎西口ロビーでのパネル展示



▲みんなのささえあいレポート・CSWのつぶやき



▲目黒区総合庁舎 西口ロビー展

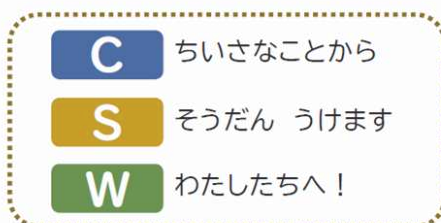
その他の取組② 地域でのPR活動や出張相談など



▲▼目黒区竹の子クラブ連合会主催
輪投げ大会に参加



▲出張相談@おかげマルシェ®



▲出張相談@田道ふれあい館まつり



▲出張相談@フードバンク目黒



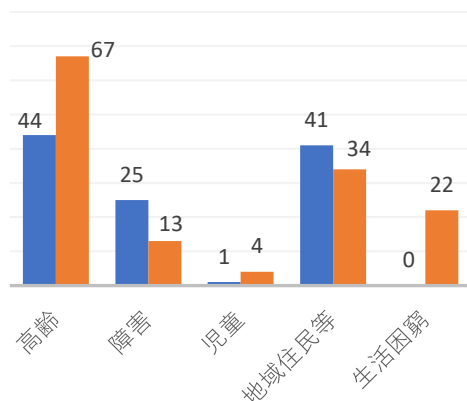
▲中学校の挨拶運動に参加

4 活動実績 ①個別相談支援

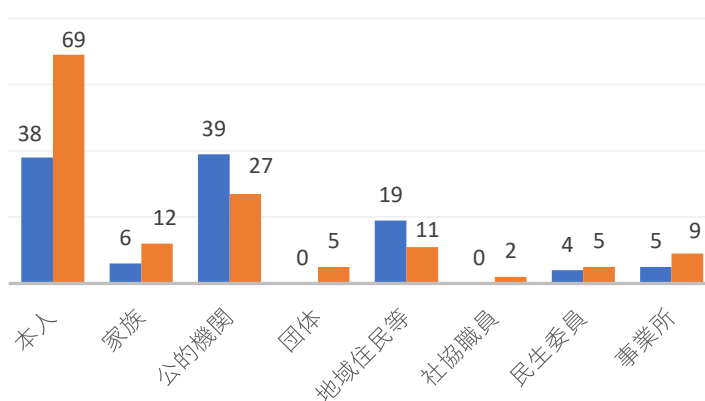
●相談件数

令和 5年度	新規	継続延べ件数	令和 6年度	新規	継続延べ件数
	111件	1,424件		140件	1,910件

●本人属性

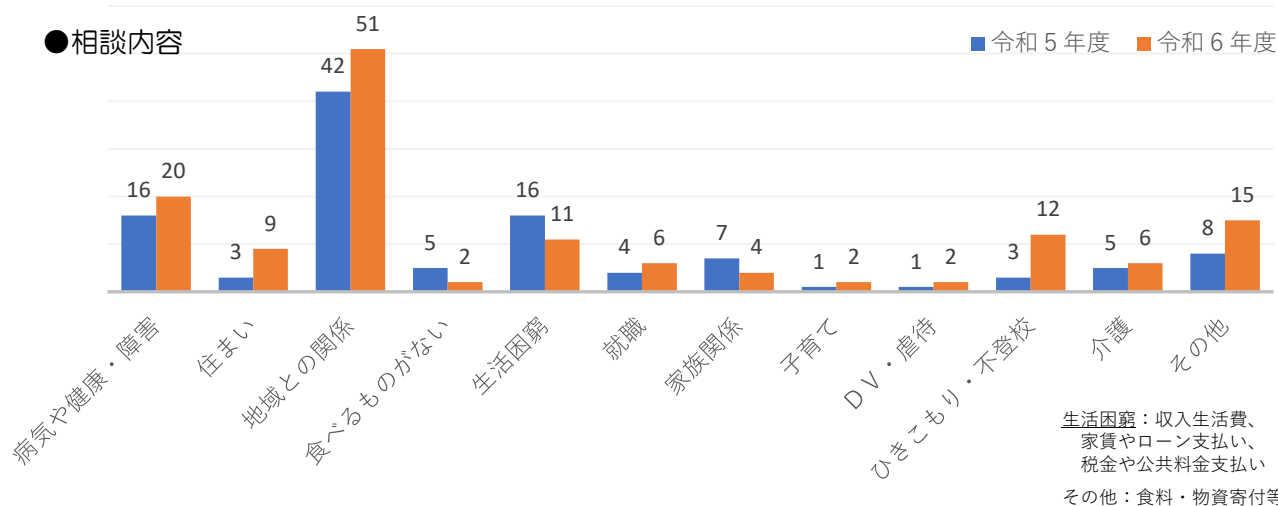


●相談経路



「高齢」に関する相談が増加した背景には、今年度は居宅介護支援事業所との連携強化を図るため、訪問でのPRやケアマネ分科会が主催する研修会へ出席し、認知度が向上したことが挙げられます。「生活困窮」について、昨年度までは「地域住民」として集計していましたが、フードバンク団体主催の食料配布会での出張相談を行ったことで、相談件数が増えたことから、単独集計としました。相談経路の「本人」からの相談では高齢者に次ぎ、生活困窮者が多く、次いで地域住民となっています。地域住民の中には、ひきこもり状態のかたや、その家族もいて、制度の狭間の窓口として認識されていると考えられます。

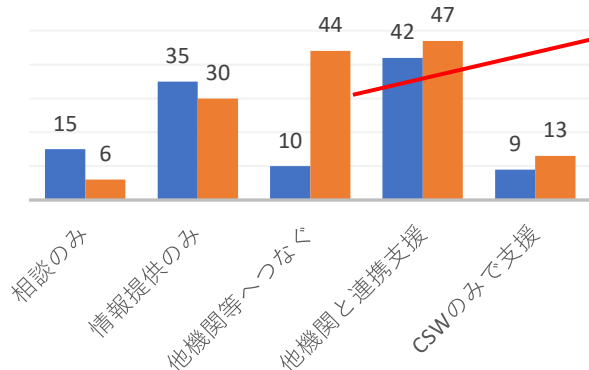
●相談内容



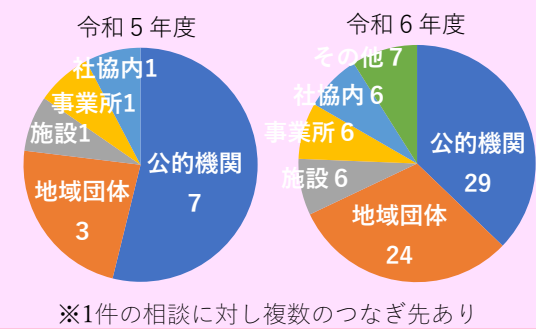
「地域との関係」に関する相談では、地域活動へ参加したいというもののほか、庭木の手入れ、集合住宅での入居者間トラブル、鳥害トラブルなどの相談が昨年度以上にありました。地域活動につなげた相談では、活動内容の聞き取りや活動先まで同行するなど、丁寧な対応を行いました。

「ひきこもり・不登校」の相談が増加した背景には、ひきこもり学習会参加者への細やかなフォローや、当事者の居場所としてスタートした「こもりびとカフェ」の開催が影響していると考えられます。

●新規相談への対応方法 ■令和5年度 ■令和6年度



●「他機関等へつなぐ」主なつなぎ先の数



相談対応では、昨年度と比較して「他機関等へつなぐ」が急増しました。単に窓口を案内をするのではなく、相談者のニーズや課題を丁寧に聞き取り、適切な機関へ確実につなぐために、必要であれば同行するなど、ワンストップ対応に努めました。

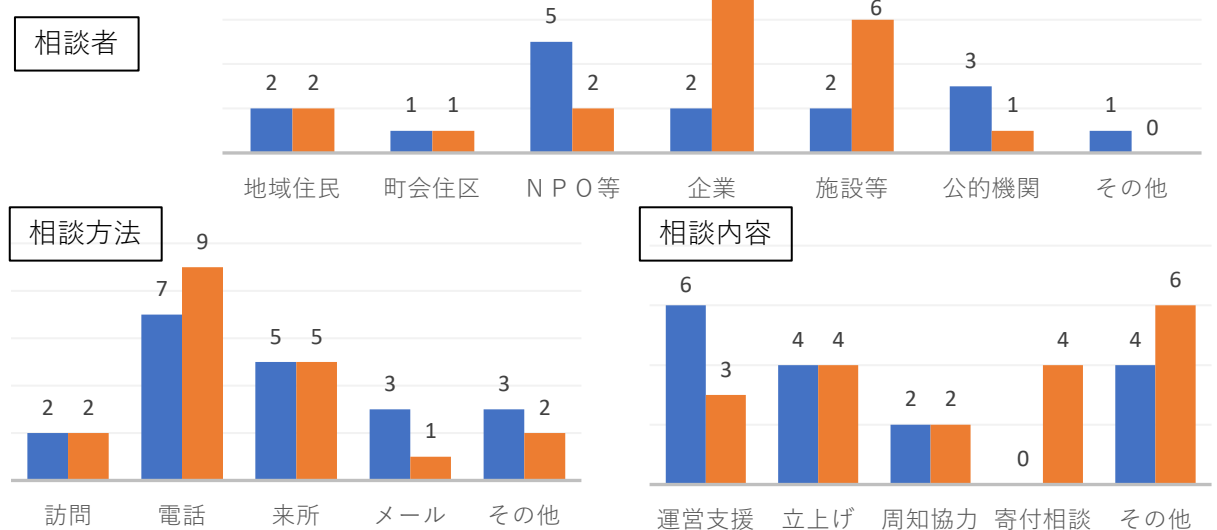
昨年度はつなぎ先の大半が公的機関でしたが、相談内容が複雑化・多様化してきていることから、今年度は、公的機関と併わせて、地域団体、NPO法人、自主グループといった地域で活動する多様な団体につなぐことができました。また、相談者が抱える課題も複数あることから、1件の相談に対して、複数の機関と連携を図った件数は18件あり、3か所以上の連携先につないだ相談は、9件ありました。

②地域相談支援

●相談件数

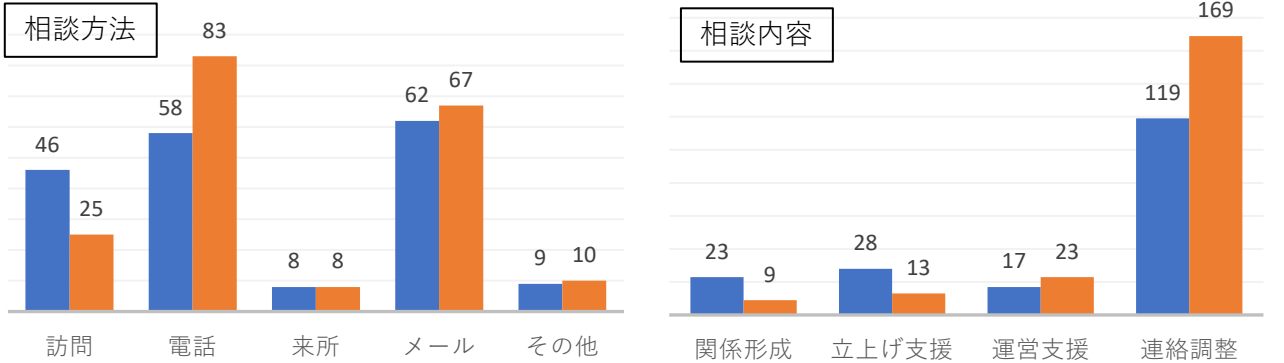
令和5年度	新規	継続延べ件数	令和6年度	新規	継続延べ件数
	16件	183件		19件	193件

●新規相談概要



令和6年度は、企業から社会貢献活動に関する問合せが増加しました。多くは食品寄付に関する相談で、子ども食堂やフードバンク、フードドライブなど、食の取組が社会に広く知られていることが伺えます。

●継続対応概要



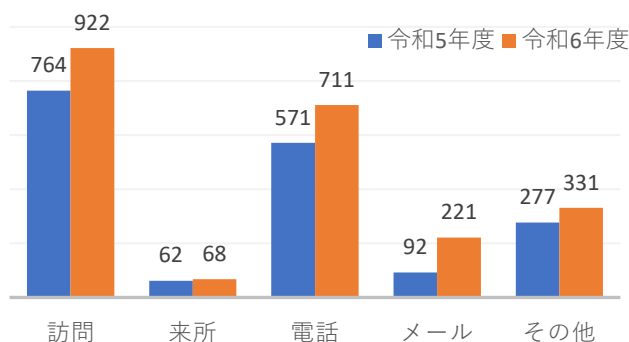
相談内容では、既に活動している団体が、新たな取組を始めるにあたっての周知協力や寄付食品のあっせんなどの運営支援や連絡調整が多くを占めました。情報提供のみで対応が済んだ場合でも、その後に状況確認等の連絡を取ることで、関わりを絶やさないよう心がけました。

相談内容の中で多かった食品寄付に関する相談では、寄付者の要望を聞き取るだけでなく、子ども食堂や地域の団体側の要望も聞き取り、それぞれのニーズに合った丁寧なマッチングに努めました。

一か所から寄付された食品を複数の団体に分配するケースが多く、受け渡しのための連絡調整が増えました。食品寄付の相談が増加している現状を受け、地域団体への分配をより円滑かつ効率的に行えるよう、新たな仕組みの検討が必要です。

③生活支援コーディネーターの取組

●生活支援コーディネーターの対応件数



●コーディネーターの取組内容

- ・社会資源の把握、ニーズの把握
- ・協議体開催のための連絡調整
- ・協議体の地域情報誌に関する活動
- ・協議体の開催イベントに関する活動
- ・各会議への出席

その他：手紙やFAXのほか、コーディネーターが「出先で偶然出会って立ち話的に情報交換を行った」場合の対応数も含む

協議体主催のイベントや情報誌の発行により、地域の皆さんに地域活動団体を知ってもらう機会を設け、実際に多くの活動につなぐことができました。また、開催や発行に伴い、情報のリサーチや活動団体への訪問取材を行ったことで、新たなつながりづくりにも発展しました。

5 まとめ

CSWが配置されて4年目となる令和6年度は、前年度に引き続き、5地区に2人配置の計10人体制で取り組みました。過去3年にわたって、地道にCSWの周知活動に取り組んできた結果、関係機関だけでなく、地域住民の方々からもご相談をいただく機会が増えてきました。地域の様々な活動へ積極的に顔を出すことで、ちょっとした相談でも気兼ねなくしてもらえる関係が出来てきたと思います。

実際に受けた相談では、そのかたの思いやニーズを丁寧に聴き取り、地域資源の活用や、近隣住民に協力を求めるなど、地域の中でのマッチングを意識しながら、課題解決に取り組ましました。高齢者の日本画の個展や、メンタル不調を抱えるかたの手作り作品販売など、個別相談から社会参加の機会として地域とのつながりをつくることができました。

居場所に関する取組では、目黒区で初めてのひきこもり当事者のかたのための居場所「こもりびとカフェ」を開催しました。開催にあたっては、ひきこもり支援を担当している目黒区福祉総合課から参加者を紹介していただいたり、日ごろから関わりのある当事者のかたにお茶出し役として活躍していただいたりと、関係者とともに温かく和やかな場をつくることができました。「いどりぷれいす」についても、思いのある方々と協力しながら、子どもたちが安心して楽しめる居場所づくりに努めました。実際に、学校に行きづらさのある児童の参加があり、“子どものサードプレイス”としての役割を果たすことができました。

また、生活支援コーディネーターとしても、協議体主催のイベント等がきっかけとなって参加支援につながった個別相談が多くありました。CSWとの兼務配置という強みを活かしながら、今後も地域づくりに取り組んでまいります。

6 今後の展望

■ 重層的支援体制整備事業の着実な実施

令和6年度から目黒区で本格実施された重層的支援体制整備事業について、参加支援事業、地域づくり事業、アウトリーチ等を通じた継続的支援事業が円滑に進むよう関係機関との連携を図りながら、地域での取組を着実に進めていきます。事業の一部が区の直営となる多機関協働事業については、区との役割分担や進め方など、実務的な整理や調整を図りながら進めていきます。

■ 生きづらさを抱えるかたの居場所や多くの人が活躍できる地域づくり

ひきこもりに悩む大人や子どもの居場所として、「こもりびとカフェ」や「いどりぷれいす」を引き続き開催します。これからも、地域の中に多様な居場所を作りながら、生きづらさを抱える本人に寄り添った支援を行っていきます。

子どもから高齢者まで、支援を受ける側・支援する側という二元的な分け方でなく、その時々に応じて受け手にも、支え手にもなる柔軟な関係性を育んでいけるよう、地域共生社会の実現に向けた地域づくりに取り組んでいきます。

■ 日々の地域でのたゆまぬ情報収集と発信、SNSの活用

積極的に地域へ出向き、様々な活動や人に出会い、顔と顔を合わせてつながっていくことが、CSWの取組の基盤になります。そうして集めた地域の様々な情報や培った人脈を最大限に活かしながら、相談対応での課題解決や地域づくりに取り組んでいきます。

また、SNSを通じてCSWの目線から地域情報を発信していくことで、幅広い世代に関心を持ってもらえるよう働きかけていきます。



令和7年9月発行

発行：社会福祉法人 目黒区社会福祉協議会

編集：目黒区社会福祉協議会 地域支援課 ささえあい係

東京都目黒区上目黒2-19-15 目黒区総合庁舎別館3階

電話：03（5708）5792 FAX：03（3711）4954